《記事》

収継と守志について

七野 敏光

夫の死後のこされた^{あによめ} 嫂^{あによめ} を夫の実弟が妻とする。至元八（一二七一）年以降、この「収継」と呼ばれる婚姻形態は元代の漢人社会にも行われるようになる。しかし適齢の弟がいれば必ず収継が行われるわけではなく、嫂が再婚しない意思を示した場合には、その意思を重んじ収継は行われない。以下では、『元典章』一八（戸部卷之四）に見える「収継」と「守志」（再婚しない志を守る）をめぐる3案件を紹介し、このやや特殊な婚姻について考えてみたい。

(1)

まず「守志する婦は収継せず」を掲げる。「収継」と「守志」との関係を理解するための基本案件である。

至元十三（一二七六）年三月、中書戸部の符文。中書戸部が扱けたる淄萊路の申。淄萊路が扱けたる蒲台県の申。そこに見える韓進の^{うったえ}告^{みまか}。兄韓大が身故り、嫂阿^{あによめ}荘が抛^の下されております。^{きまり}例に依り彼女を収継せんことを乞いねがいます（以上、韓進の告）。この韓進の告をうけ阿^{たず}荘に問ね、「韓大が身死り、自ら守志することを願っており、他人に嫁ぎはいたしませんし、また小叔韓進との間で^{おとうと}続親（婚姻関係を継続）することもございません。もし道理にはずれる事が有れば、願^{なにとぞ}杖一百七下の刑罰にお当てください」との^{きょうじゆつ}状^{つまび}結を得ました。この件につき蒲台県が看詳らかにいたしました。韓進は兄韓大の差^{もと}発^{けつ}を承継いたしますから、理として嫂阿^{もと}荘も収継すべきであります。明らかなご決定を降されん事を乞う（以上、蒲台県・淄萊路の申）。この淄萊路の申をうけ戸部が前例を照得（調査）いたしました。〔前例〕近ごろ奉けたる中書省の判送。そこに見える曹州法都馬の告。故夫の弟阿散が、わたくし法都馬を収継したいと^{もと}要めておりますが、わたくしは並して改嫁せず、情^{こころ}より守志することを願^{むすこ}い、男と同居して差に当たるつもりでございます（以上、法都馬の告）。この法都馬の告をうけ此に都堂の鈞旨（宰相のご指示）を奉け、案件を戸部に送り、戸部が照擬得

(文書調査と判断を) いたしました。至元八(一二七一)年二月内に欽奉したる^{みことば}聖旨条画内一款の^{あらまし}節該に「夫を亡くしその服喪期間を^お闕えた婦人が守志する場合はそれを^{ゆる}聴し、舅姑が彼女を一面に改嫁してはならない」とあり、また至元八年十二月十四日に欽奉したる聖旨の節該に「小娘・阿嫂は^{みと}収継せよ。此を欽しめ」とある。これら文書の聖旨を踏まえて戸部が議得(審議)いたしました。この婦人法都馬はずでに守志して嫁がないことを願っておりますので、守志に^{したが}聴従うべきであると^{はんたん}擬いたします。以上の内容を戸部が上呈し「擬を^{みと}准める」との都堂の鈎旨を奉けた(以上、中書省の判送)。この前例調査を踏まえ、今見申(淄萊路の申)を^な抛け、戸部が再び議得いたしました。今後このような守志の婦人について、^{さわがしく}収継すべき人がやいのやいのと^{なく}搔擾してはならず、守志に聴従う。もし守志の婦人が弟との^{みと}収継ではなく召嫁(婿取り嫁入り)すれば、その夫妻各人を断罪したうえで、^{なく}収継すべき人をして収継せしめる。そしてこのことを^な遍行照会(あまねく文書を下し確認会得)せしめれば、^{なく}詞訟を革去すことが望めそうであります。以上の内容を戸部が上呈し「呈を^な准め施行せしめる」との都堂の鈎旨を奉けた。

.....

韓進が嫂阿莊を収継することの可否を判断する案件に引かれる前例(法都馬が故夫の弟阿散の収継を拒む)中、寡婦の再婚に関して相反するようにも見える二つの^{みことば}聖旨が示される。1は「夫を亡くしその服喪期間を闕えた婦人が守志する場合はそれを聴し、舅姑が彼女を一面に改嫁してはならない」と、収継に触れることはないが、守志を重んじる聖旨であり、2は「小娘・阿嫂は収継せよ」と、収継を推し進める聖旨である。そしてこの1守志を重んじる聖旨を踏まえて、収継についても守志する嫂の意思は従われるべきであり、強いて収継されることはない。また2収継を推し進める聖旨を踏まえて、守志にかこつけ弟との収継を拒みながら、嫂が他者と婚姻関係を結んだ場合には、その夫妻ともを断罪し、離婚させたうえで嫂は収継者である弟に^{きまり}収継させるという例が形成される。

ちなみに、蒲台県は「韓進は兄韓大の差発を承継いたしますから、理として嫂阿莊も収継すべきでありましょう」と、収継と課役とを絡めて韓進による嫂阿莊の収継を推すばかりで、守志をどう扱うかにつき論じることはない。収継における地方官(課役の事に責任を負う)の関心が那邊にあるかを垣間見せる、そんな史料といえそうである。

(2)

つぎに〔田長宜が強いて収娼す〕を掲げる。暴力的な表現にご注意いただきたい。

延祐五（一三一八）年二月初六日、江浙行省が准けたる中書省の咨。中書省が掲けたる刑部の呈。刑部が奉けたる中書省の省判。中書省が准けたる遼陽省（遼陽行省）の咨。遼陽行省が掲けたる大寧路の申。大寧路が掲けたる利州の申。そこに見える田阿段の状告。皇慶二（一三一三）年十月内、夫田千羊が身故り、わたくし阿段と児女四人が抛下され、実家である父段琮の家にて守服しておりました。延祐四（一三一七）年三月二十七日に、婆阿馬が男田五児を引領れやっ来て、父段琮に「我は田長宜に阿段を収継させようとしたんだが、あなたは那厮が在先に作過したのを嫌い、そうはさせてくれなんだ。今日はこの五児に収継させようと思いますが、怎生でしようかな」と言い、それに対して父段琮が「俺女孩児は持服（田千羊の喪に服して）守志し、現に四人の児女がおります。如何に収継しますのかな」と回言えました。この日、婆阿馬はわたくし阿段を彼女の家に行かせ食べる飯を作らせました。後晌に至り、実家に行還ろうとしたところ、予期もせぬことでありましたが、小叔田長宜がわたくしを現住の正房内に拖り込み、門を閉めました。そして田禄児には門の見張りをさせ、田五児にはわたくしの両手を拿把ませ、田長宜が棍棒を用いてわたくしの左膊を二度打ち訖わり、動けなくしたうえで、わたくしの頭髪を窓の櫺に拴繫ぎとめ、衣服を剥去りました。そして小叔田五児がわたくしの両手を拿住み、兄田長宜にわたくしを収継させおえました（以上、田阿段の状告）。この件につき田長宜の招伏を取り訖え、その犯す所を原ねますと、甚だ風化を傷ない、人倫を敗壞いたします。特別な身分関係にない一般人の強姦例より一等を減じ、杖断九十七下と量擬いたします。誠に差池あることを恐れます。事が通例に関係いたしますので、宜しく合干部分（関係部門）をして定擬していただくのが相応でありましょう（以上、利州・大寧路の申・遼陽行省の咨）。この遼陽行省の咨をうけ中書省が案件を刑部に送り掲けたる刑部の呈。刑部が議得（審議）いたしました。田阿段は夫が亡くなり守志すること六年に及びますが、叔の田長宜が賺いて彼女の家に行き、先ず弟田禄児に門の見張りをさせ、次に田五児に彼女の両手を捉拿ませ、親行から棍棒を用いて彼女を打拷し、頭髪を楸控み、衣服を剥去り、強行いて通姦し訖りました。その犯す所を原ねますと、常を乱

し俗を敗り、甚だ風化を傷ないます。無夫の婦人を強姦する例に比依らして、田長宜を杖断一百七下と擬いたします。弟田五児等は就便に量情断決（刑罰を執行）し、田阿段については実家での帰宗守志に聴従い、もし別行に招嫁（婿取り嫁入り）をすれば、例に依り断罪し、収継すべき罪人（田長宜ら兄弟たち）をして収続（収継して婚姻関係を継続）せしめる。もし呈を准め、遍行照会（あまねく文書を下し確認会得）せしめられれば、薄俗を激励すべきに庶しでありましょう。具呈したれば照詳らかにせられよ。此を得られよ（以上、刑部の呈）。この刑部の呈をうけ都省が議得いたしました。田長宜が招する所の罪犯は、特別な身分関係にない一般人が無夫の婦人を強姦する場合より等を減じ、杖断九十七下とし、余は刑部の擬を准める。江浙行省に咨し照驗めて、上の依に施行せられんことを請う。

・・・・・・・・・・・・・・・・

田長宜ら三兄弟の暴挙はどこからみても収継を騙る強姦行為であり、これで収継がかなうはずもなく、彼らが刑罰に服することになるのも当然である。むしろ「無夫の婦人を強姦する例に比依して、田長宜を杖断一百七下と擬ることといたします」と、減等なしの重罰にあてる刑部の判断にこそ従いたい。兄弟の母親である阿馬の言葉に「你是那厮が在先に作過したのを嫌い…」とあるが、この「作過」も、おそらく今次同様の乱暴狼藉だったに違いないと、つい思い込みたくなる。そんな暴挙である。

さて、暴挙はともあれ、本件で注目すべき点は、田長宜らが事後なおも収継者としての資格を剥奪されていないということである。「田阿段については実家での帰宗守志に聴従い、もし別行に招嫁すれば、例に依り断罪し、収継すべき罪人をして収続せしめる」とは、[守志する婦は収継せず]に示された例を踏襲したものだろうが、現代的感覚からはやや理解しづらい。田長宜らを「収継すべき罪人」とするのも、どこかしら妙ちきりんな気がする。だが、原文に「収継罪人」とあるのだから、そう訳出するしかない。気にはなるが、いた仕方ない。

(3)

[叔が兄嫂を収す] は、前2件とは異なり収継が認められた案件である。

至元十(一二七三)年、中書戸部の符文。中書戸部が扱けたる来申(中書省管下不詳路の申)。そこに見える付望伯の告。兄付二が病に因り身死り、妻阿牛が抛下されました。わたくし望伯は父母に、嫂阿牛を体例に依り収継してよいかどうかを問ねました(以上、付望伯の告)。ならびに牛望児の状告。付望伯はわたくし望児を欺騙しました。情より家にいて守服することを願います(以上、牛望児の状告)。取りたる一千人(関係人)の詞因。この件につき府司(不詳路総管府)が照得(調査)いたしました。付望伯には現に妻子が有り、先曾に彼の父母に阿牛を接続(兄を接いで婚姻関係を継続)したいと説要たところ、允許されませんでした。そこで付望伯は父母が家にいないおりに、強行いて通姦し訖わり、そのため阿牛が実家に帰ってしまったという次第であります。公公付義と婆阿丘は阿牛の帰家を義に適うものとして許し、男付望伯に彼女を収接(収継して婚姻関係を接続)させず、ただ阿牛をして本家にて孫児を恩養いながら守志させております。この案件は例たる事理(以後の判断のため前例となる事案)に該当いたしますので、いまだ敢えて懸便いたしません。照詳らかにせられん事を乞う(以上、不詳路の申)。この不詳路の申をうけ中書戸部が相度りました。牛望児が児男を恩養いながら守志したいといっても、付望伯がすでに彼女を強要姦汚してしまっており、その上付望伯は牛望児亡夫の親弟であり、すでに降された聖旨の事意に欽依しております。已婚を准め、叔をして牛望児を収継させその妻となさしめるべきでありましょう。合下に仰せて照驗め施行せしめる。

.....

収継の経緯について物語る。付望伯が嫂牛望児を収継したいと願い、舅姑も承知してくれるのならば、その収継に応ずる旨の返事を牛望児から得る。付望伯は既婚者であるが、その婚姻と収継とは別と考え、重婚問題について両人は頓着しない(実際、ほぼ同時期に重婚としないのが例となる)。ところが、舅姑(付望伯の父母)は重婚となることを慮ってか、この収継を承知しない。そこで承知のないまま、付望伯は牛望児に迫り「強行いて通姦」し、事後、舅姑の承知しないことを知った牛望児が、「欺騙」したのね、とばかり

実家に帰ることとなる。簡潔に過ぎるが、およそこんなところだろう。

さて本件は「強行いて通姦」「強要姦汚」（中書戸部の言葉）など、その文字面だけを見ると、あたかも強姦犯がその行為により収継を認められるという、有り得ない話のようにも思える。だが、付望伯と牛望児がそんな暴力的関係にないことは物語ったとおりである。牛望児が「欺騙」だけを訴えることから分るように、舅姑の承知さえあれば、彼女は収継に異存なしであり、しかも舅姑が承知することは、収継の可否に不可欠とは考えられない。まさに牛望児が守志するか否かだけが収継の問題であり、通姦以前、付望伯に対して収継に応ずる返事をした時点で、彼女が守志を絶ったと中書戸部は判断したものである。そのため、嫂と収継資格者との通姦は不問に付し、「已婚（やはり「通姦」を指すのでしょう）を准め、叔をして牛望児を収継させその妻となさしめるべきでありましよう」との判断を中書戸部は下したと考えられる。

物語から始めた本件解釈、および〔守志する婦は収継せず〕〔田長宜が強いて収嫂す〕についても、史料文言を矯めた解釈と責められなければ幸いである。